

報



會

會 岳 山 本 日

35

月 五 年 九 和 昭

エヴェレスト探險難

藤 木 九 三

世界の屋根にひときは高く、「白衣

の聖母」と仰がれるチョモルンマ

Chomolungma——マウント・エヴェ

レストのチベット原名——の頂上に

棲んでゐるといふ、白獅子に關する

傳説がある。そしてこの靈獣の乳は

すべての靈肉の障礙に効験がいやち

こで、いはゆる不老不死の靈藥とし

てチベット人の間に渴仰されるもの

である。ところが、これを手に入れ

ることの出来るのは、世界ぢうでた

だ一人、ラサのダライ・ラマの位を

承け繼いだものだけだといひ傳へら

れてゐる。……これだけなら別に

取り立てゝいふ程のことではないの

だ。ところが、去る一九二一年この

方、しばしば大掛りな探險隊がエヴ

レストの頂上を極めようとしてや

つて来るのは、てつきりこの白獅子

の乳を手に入れるためだと、チベッ

ト人は信じてゐるから奇抜だ。と同

時に、あらゆる馬鹿氣切つた故障の

原因ともなるから厄介なのだ。

第二次エヴェレスト・エクスペデ

イションは、かうした無智驕慢な國

情のバリケイドを乗り越え、早くも

聖峰の麓ロンブク僧院に到着した。

一行の隊長は、深慮と機智に富んだ

ゼネラル・ブルースである。かねて

馬を射よ」といふ兵法の巧みな運用者であつた。彼は、世界一の高峰に組み付いて乾坤一擲の勝負を決する前に、チベット人にもつとも信任の厚いラマに取り入る策を忘れなかつた。そしてブルースはロンブクに着くや、直ぐ隊員一同をしたがへ、本國から用意して來た數々の土産物をたづさへて僧院を訪問した。

その時ラマは、ブルースをかへり見て尋ねた。「あなた方は、いつたい何の目的でこの地を訪問されたか？」

「私達は世界の高い山を、次から次へと巡禮して廻る山岳宗の信徒である……」と前提して、ブルース將軍は次のやうに答へた。

『イギリスには、古くから山を崇拜する一派がある。私達はその宗派の敬虔な作法として、山岳通路の途上にある者である。そして今や私達は山を越え、海を渡り、やうやくの事で思ひがけない、世界で一番高い、同時にものとも神聖なチョモルンマの山下に辿りつく事が出來たのである。……願はくば、この上とも無事頂上を禮拜することが出来るやう、一同のための祈願をお願いしたい』と。

表面、ラマは萬事を了解したらしく、頗る上機嫌に見えた。そして探險隊の前途を祝福するための祈願がいつも崇嚴に勤修されたのだつた。

もつとも、この時ラマが奏したのりとの文句は、一同の期待に正反對のものであつた——それは數日後ふとした機會に通譯を介して知つた——が「知らぬが佛」の白人一行は、まじまじとラマを味方に引き込んだものと信じ切つてゐた。

にも拘らず……といふよりは、ラマにとつては當然の結果として——エクスペディションはのつけからいふろんな故障にぶつた。第一に、土着の人夫たちは、あらゆる種類の荒唐無稽な迷信を楯に、氷河上の荷役を拒んだ。そして若し、ヤクに荷を負はせてロンブク氷河の上を歩かせようものならスクバ——毛深い人間が襲ひかゝつて咬み殺し、生血を吸つて骨ばかりにしてしまふとも云つた。それがため、ベイス・キャンブの位置といふ重大な問題が、先づ暗礁に乗りあげてしまつた。

エヴェレストの山中に棲んでゐて絶えず探險隊を悩まし、白人の冒瀆行爲を斥ける役目をつかさどると信じられてゐるものに、希犬、魔鳥、雪男などの魔性のものがある。この内最後の「雪男」といふのは、先きに述べたスクバのことだが、チョモルンマに棲むものにかぎり、特にロンブク僧院のラマ達が彼等をさして呼ぶ「Mikantji」といふ言葉から來てゐる。

いつたいスクバ Sclaba は、ところによつてソクバ Sockha とも呼

目

次



エヴェレスト探險難

藤 木 九 三

木曾川と利根川 別所梅之助

欲しいこと、欲しいもの

荒井道太郎

今春の鯉岳 立大山岳部

會員通信

四月末の藥師岳行

會務報告

四月常例理事會報告

會員住所變更

新著圖書

會員寄贈圖書

會員計報

新入會員氏名

會員章再交附

退會者氏名

山日記について 角田 吉夫

編輯後記

んでゐるが、共に「毛深い人間」を意味してゐる。そして各種の文獻を綜合してみると、シツキム・ヒマラヤ方面でミゴ・Migoと呼び馴らしてゐるものとまったく同一であることが首肯される。チベット人は、一般にスクバのことを話す場合には敬稱をつける習慣がある。それはわが國で「狐」のことを「お稲荷さん」と呼ぶのと一緒で、さういふ風にしないと、この魔性の靈的存在は不意に村中に災難をもたらしたり、女や子供を擄つたり、牛や、馬や、山羊などを撲り殺したりするからである。そしてこのスクバの王はチョモルンマの頂上に棲んでゐて、何時も高い氷の崖の上から下界を見おろし、今麓の村で何事が起つてゐるか、または何某の所有の家畜が、何處を何ういふ風に歩いて歩いてゐるかといふ事を注意してゐて、何時でも山から跳びおりて襲撃の出来る準備をしてゐる。殊に手の持つ力と、脚の跳ぶ力にかけては、世界ちうで彼に匹敵するものはない。また極めて頑丈な尻尾をもつてゐて、休む時にはこの尻尾の上に腰かけることが出来るとも云はれる。そしてスクバは「毛深い人間」といはれるだけあつて、眼の上まで垂れる長い前髪を振りかざし、雪の中をびよんびよんと跳ねまはるといわれる。だから、彼に返ひかけられたら山をどん／＼驅け下るに限る。さうすると長い髪が眼に入つてまごまごするから、その隙を見て難を遁れることが出来るとも傳へられる。

3

さて、そのスクバの頭が、今日しもチョモルンマの頂上にうづくまり、頰杖を突いて、朝から晩まで麓の村や野を見おろしてゐた。……かういふ風に書き出したらきりがないので、たゞ傳説としての「エズエレストの雪男」の梗概を話すことにする。

彼は夕暗の迫るのを待つて山から下り、野良仕事から歸つて来る百姓の小娘を襲つて掠奪する。そして山に伴れて歸つて結婚し、間もなく可愛い子供が生れる。子供が大きくなり、やつとひとり歩きが出来るやうになつたある日、彼は両親の眼を盗んで氷河の上を跳び廻つてゐた。そして知らぬ間に山を下り、麓の村の近くへ來てしまつてゐた。その時、恰度向ふから一匹の牝山羊がやつて來て、スクバの子供を見るやびつくりした。しかし牝山羊は、かねて彼の女の夫が子供のいのを盗しがつてゐることを思ひ出した。そして醜い子供ではあるが、迷ひ兒のスクバを誘拐してわが家に伴れ歸り、自分達の子供として育てた。一方、子供の行方が知れなくなつたスクバの両親は大騒ぎをはじめ、直ぐ仲間を呼び集めて同族會議を開いた。いろいろ詮議の末、子供がゐなくなつたといふのは、結局親の監督が行き届かないからだといふ理由で、子供の搜索に關するかさり、同族のものには責任がないといふ事に決定した。

ある日のこと、仲間の頭が悲歎に暮れてゐる両親のところへ遣つて來て、「いま麓の村はづれで、お前の息子が山羊の群と一緒に遊んでゐるのを見た」と云つて知らせしてくれた。スクバの親は大喜びで、直ぐ山を跳びおり、そして息子がゐたと教へられた家畜小屋の近くへ來ると、向ふから「頭が五つで、角が十本」ある山羊が遣つて來るのに出會つた。スクバはびつくりして逃げやうとする、例の十本角の山羊が逐ひかけて來て、遂にスクバを雪の上に追ひ詰めて、さんざ角で突き廻した。で結局スクバは、命からがらでチョモルンマの頂上に逃げ歸つた。この意氣地のない行動の一仕始終を見てゐたスクバの正は、おほひに怒り、彼を仲間から追放してしまつた。

小集會通知

左の通り小集會を催します。
萬障御繰合せの上御來會下さ
い。

アラスカの旅 (假題)

東 良 三

期日 六月七日午後七時
會場 三會堂(赤坂溜池)

ンベンが、山の麓をさまよつてゐると、久し振りで暮れるわが兒に出會つた。彼は大喜びで馳けより「おいお前好く遠者でゐて呉れた！」と呼びかけた。するとスクバの若者は、げん顔をして「お前さんなんか知るものか……俺の親父は牝山羊ですぜ」

さういひ乍ら、スクバの若者が後をふり向くと、彼のいふところの親父の牝山羊が此方へやつて來るのが見えたで彼は思はず大聲で「それ、彼處へ父ちゃんがつて來るよ！」

と叫んだ。年取つたスクバはそれを聞くと、ふと若者が指さす方を眺めた。……と、此方へやつて來るのは例の「五つ頭」に「十本角」の牝山羊だつた。それを見るや、年取つたスクバは「うーん」とひと聲叫びてその儘後ろ向きに倒れてしまつた。すると其處は數千尺の斷崖になつてゐて、憐れな雪男は、二三遍もんどり打つて底知れぬ奈落に墮ちて行つた。

4

チベットのグライ・ラマが、向ふ十八年間マウント・エズエレストの探險を禁止したといふことは、凡そこれほど時代錯誤の甚だしいものはないといふ意味で、世界ちうに話題を振りまいた。私がこゝに「チョモルンマの雪男」の傳説を紹介した動機と同時に、この事件がわれ／＼山岳

人に訴へるところのものは、從來單なる臆昧民族の迷信だといつて罵倒してゐた事柄が、直接エクスベディションの成否を左右する重大性を帯びて來た一事である。もちろん、科學に反抗するこの種の宣言が、今後何ういふ運命をたどるかとは別にしても、わが地球上に残された最後の極地探險といふことが、單なる迷信によつて十八年間にシャット・アウトされるといふ法はありえない。かならずや二三年のうちに反古にされるに違ひない。……だがしかし、考へようによつては、グライ・ラマのご託宣はわれ／＼東洋民族にとつてちよつと痛快味を感じしめる節がないでもない。いや、そんな管らない考へは廢めて、むしろ積極的に、この機會を利用して同志を糾合し、極力グライ・ラマを説き伏せて東洋人のみでエズエレスト・エクスベディションを組織すべきだ。そして「鬼の留守に洗濯」の格で、これまで一手販賣のやうに振舞つてゐた連中の鼻をあけさせることだ！ しかもチョモルンマの頂に立ち得る實力とその可能性については、すでに昨年のエクスベディションに際し、われ／＼の仲間が二萬七千四百呎の高さにまでキャンピング材料を早あげた、ことによつて立派に試験済み——それは相手方の實力にくらべて格段の差において——になつてゐる。何うです諸君！ 山登りのモンロー主義のため、ひとつこの冒險に手を付けて見る勇氣はありませんか。

六日は食糧の關係上餘り思はしく
ない天候乍ら午前七時出發、大窓、
小窓、三窓を縦走し、一氣に平蔵より
御前小舎に至りました。此の行程中三窓の手前のコル、

即ち三窓の北側の岩峰と小窓ノ頭の
コルから三窓へ池ノ谷側をトラバ
スする所は最も悪く、下層の雪が氷
りその上部に表面のクラストした一
尺程のザラメが積つてアイゼンはき
かずザラメ雪に乗つて流される恐れ
が充分にあり最も緊張を要した箇所
で僅か五〇米位の所を一時間半も費
した。一昨年春も富部の者が通つた
時非常に悩まされた場所でありま
す。三窓から右捲きに池ノ谷乗越へ出
る池ノ谷最上部の急な雪渓は、最も氣
持よくアイゼンを使用出来た所で此
の乗越から鯉までも、鯉への最後の
急斜な登りで一寸手間取つたのみで
頂上へ二時に着きました。平蔵コル
への下りは例年現れて居る鎖もわか
らず且つ氷つて居る爲ステツプを切
つたり、アブザイレン等で下り後は
樂にアイゼンのよゝ鯉御前小舎に
着いた。(七・三〇)本日は相當變調な
氣温で最低零下二十度を越えて居り
ました。一日滞在し翌日立山川をワ
カンで降りましたが湯淺、山本等の
班が登つて来た當時より甚だしく谷
はデブリで覆はれて居ることを知り
ました。

早月尾根 (山縣 榎本)

三月二十六日パンバ島から直に早
月尾根に取付一寸無理な所もあり
ましたが野營地點である一五〇〇米

位の所までスキーを穿きました。ブ
ナクラ對岸の谷を登り適當な所へ取
付くのも雪質次第では良い登路では
ないかと思ひます。どちらにしても
所要時間は六時間位でせう。

二十七日は晴天にて強風でした。
野營地を朝四時半に出て直にアイゼ
ンに穿き替へました。三角點まで苦
しい登高でありましたが以後は鯉西
面の多くのルートを探察しつゝ、稍
平坦な尾根を比較的樂な氣分で歩く
ことが出来た。三角點を過ぎ二六
〇〇米附近のピークまで何等技術を
要さぬ所で、唯パンバ島側に張出し
た大きな雪の波を乗り越すに苦しむ
程度です。此のピークからは急に岩
も現れ且つ尾根も瘦せて来ますが大
したものではなくリツツ通る歩けま
す。最後の別山尾根との接合地點へ
は普通登られるルンゼに堅雪がつま
つて居たため左側の岩稜を攀ち鯉岳
へ立つたのは二時頃であつた。早月
尾根は技術よりもむしろ體力的問題
であると思ひます。時間の關係上懸
場の殆んどを池ノ谷側へ大きく捲き
つゝ下り野營地まで三時間餘を費し
ました。翌日パンバ島へ下りました。
立山川入り立山、大日岳
(湯淺、山本、他五名)

三月二十六日パンバ島小舎より立
川を登り(立山川はその中頃が悪く
兩側が切り立つてゐる爲雪崩の危険
性が充分ありますが、早朝此の附近
を通過すれば上部は廣げた谷で其の
危険性は割合に少いと思ひます。兎
に角鯉御前小舎に入るルートとし

て興味深く、或は彌陀ヶ原を通過し
て小舎に入るよりは樂ではないでせ
うか)第二根據地である鯉御前小
舎に入つた二班が合同して登つたも
のです。

四月二日、快晴にめぐまれ小舎か
ら尾根傳ひに雄山に往復、四日、共
の肩までスキーを使用して奥大日岳
に登りました。
長次郎谷より鯉岳
(湯淺、山本、濱野、中山)
四月七日、長次郎谷より三窓乗越
に出でハツ峰ノ頭に登りハツ峰を偵
察し、引返して長次郎の谷を経て
鯉岳に登頂し平蔵谷を下つて小舎に
歸りました。此日は絶好の雪質で全
行程をアイゼンで終始しました。長
次郎谷、平蔵谷とも未だ大きなデブ
リの跡は見うけられませんでした。
源次郎尾根(湯淺、濱野、中山)
四月九日、平蔵谷より第一、二峰間
のコルに出で第一峰を往復し、第二
峰に登り、鯉岳との鞍部へ眞直ぐに
下りました(小舎よりの所要時間六
時間弱)。より鯉へは平凡な雪稜
で、雪質悪くもぐつて時間がかかり
そう、又火した興味が起らなかつ
たので割愛して平蔵谷を下りまし
た。

第一、二峰間の平蔵ルンゼは傾
斜は著しく急で、雪面は非常に硬化
して鞍部までカット、ステツプを必
要とした。鞍部には雪庇が出てゐた
が左に薄いところがあつたので容易
に登り得た。第一峰の登りは至極簡
單なものでしたが、第二峰の登りの

一寸の間が悪く、其の上雪が次第に
緩んで最悪のコンディションとなり
少し手間取つた。第二峰の頂附近は
鋭い雪稜で平蔵側へも長次郎側へも
殆んど垂直に落ちて今の状態では下
ることは不可能に思はれました。頂
附近はベツトリ雪に覆はれビレー、
ビンが無いので少し鞍部寄りに下り
岩場に出てアブザイレンをして鞍部
に下りました。此の日は快晴にて平
蔵谷は物凄くまで雪崩の交響樂が響
きわたり、谷は一面にデブリで荒さ
れてゐました。

其後ハツ峰を志してゐましたが悪
天候のためや、バアテイの者が雪盲
におかされたりして全然手を付ける
ことが出来なかつたのは残念です。
猫又山(山縣)
三月三十一日ブナクラの天幕へ入
り四月三日猫又山を往復しました。
ブナクラ乗越より最初の登りは傾斜
も五、六〇度の急ですが次第に緩
くなり上部の三分の二はスキーの使
用も許される地形となります。然し
小黒部側の人きな雪庇には充分の注
意を要します。
尙ほ八日には偵察旁々小窓尾根の
一、二〇〇米附近まで登りました。登
りには雪岩(全然埋没)より下の雪
崩路を選びました。尾根のこの邊り
までは何の障壁もありませんが、こ
れより上は相當面白い登攀が出来る
と思ひます。(昭和九年四月)

町名變更・轉居の際は本
會事務所に御通知下さい

會員通信

四月末の藥師岳行

四月末十日間ばかり休暇が與へら
れたので左のやうな「スキーの山旅」
を行つた。はじめに立山行を希望す
る一人の友人と一處に室堂まで行き
大日一早乙女の尾根縦走をして藤橋
へ一泊の後、友人は歸京私は藥師岳
へ向つた。雪の藥師岳は前から行き
たいと思つてゐたが「山岳」にあつ
た島田氏の「春の藥師岳より針の木
越え」を読んで一層行く氣になつた
のであつた。

四月二十七日(晴) 藤橋(七・〇〇)
―眞川水电取入口(二・〇〇)
二十八日(晴) 眞川水电取入口(七・
〇〇)―太郎平(四・三〇)―眞川小屋
(五・三〇)

今年は四月末の積雪が例年より多
いので太郎小屋は崩出せるかどうか
と思つてゐたが、行つて見たら全く
雪の下で何處にあるか見當も付かな
い(大日岳の小屋もそうであつたが)
すぐ、眞川小屋まで降りて見たが、
これも雪で潰れてゐて使用出来ず小
屋傍の雪の中に野宿した。
二十九日(曇後雪一雨) 眞川小屋
(六・四〇)―藥師岳頂(一二・四〇)―
五〇―眞川小屋(三・〇〇)―有峰
(山本)(五・四〇)
歸途太郎平から雪雨に濡れて立止
まると寒いので休みなしに降りました。
有峰に着いた時は相當疲れてゐて、
一軒家から煙が立つてゐるのが見え

やがて、先に荷を持って降りたガイ
ドの一人が迎ひに出て来たのが見え
たので、つい杖を擧げた。

三十日(雪) 有峰滞在

三十一日(晴) 有峰(七・四〇)―
大多和(二・四〇)―土(三・四〇)―
猪谷―富山(六・三〇)

大多和まで雪橋をさがしたり、路
のくづれてゐるのに遭つたりして時
間がかかった。土からは乗合自動車
猪谷から汽車。

ガイドは芦崎寺の人二人頼んだ。
ちようど他にもう一人太郎の小屋の
監理をしてゐる者が小屋の様子を見
に行きたいといつて一處に行つたの
で都合もよかつた。

芦崎寺の案内組合では小屋の様子
が解らぬので薬師岳は水電取入口か
ら日歸りにしたらどうかと言つてゐ
た。

十二日ばかりうちをあけたわけだ
つたが歸りの汽車中早や再び雪の山
山に戻りたい心地がさかんにした。

(川邊主計)

春のスキー行

第一日 白馬山麓にまいりました
が雪が非常に深く豫定通り進行出来
ないので草津にまいりました。例に
依て遊峠から横手山に登りました。
春とは云へ、素晴らしい雪質で横手
の頂上から熊の湯まで一氣に滑走は春
のスキー行とは思へないほど宜しう
御座いました。

第二日 朝から日本晴なので熊の
湯附近の一番手近な笠岳に登りまし

た。正午丸池のヒュッテに着き、あ
まり天氣がいゝのでいゝ氣持に夕方
までノビてしまひました。春光を背
に受けながらチケザグの道を發咄に
着きました。宿の二階から夕日を浴
びた北アルプスの連峰は實に見事で
した。

第三日 發咄から焼額に白樺の間
を登りました。頂上から妙高、戸隠、
黒姫から立山連峰、眼下には筑摩
川まで一眺の内に見る事が出来まし
た。それから十八キロの滑走(所々に
雪庇あり)ですが途中龍王へ少しば
かり登るだけで、あとは直滑走でも
ボーゲンでも心行くまゝにエンジヨ
ーイ致し夕方夜門村に着きました。

今年始めて出来たルートでこのツ
アは實に宜しいと思ひます。焼額
まで發行すればあとはほとんど滑走
で宿の主人が四十五度位の斜面を五
十人位横隊で滑走出来ると申しまし
たが實際でした。只三月下旬から四
月まで所々に雪庇の上を滑走する事
と天氣の悪い日は見通が少しもきか
ない事、所々にやせ尾根がある事、
注意を必要と思ひます。是非一度御
推め致します。(宇田川生)

草津(八時二十分)―芳ヶ平(十一
時三十分)―横手山(三時)―熊の湯
(四時三十分) 午後晴
熊の湯(八時)―笠岳(十時)―丸池
(十二時)―發咄(四時) 晴

發咄(七時)―焼額(九時二十分)―
龍王(十時二十分)―夜門村(三時)―
夜門驛(四時半) 晴

拜啓 春の饗宴會益々御清榮の
段率賀候。陳者當部に於ては四月十
四・十五兩日日本校尙賢館北室にて山
岳展覽會を開催致し候。陳列品は高
橋與兩先輩の所蔵さるゝヒマラヤの
寫眞二十數葉、當部の昨年、一昨年の
夏に行ひたる南・北千島遠征の際撮
映せる寫眞、臺灣山岳寫眞をはじめ、
高橋先輩所蔵にかゝるヒマラヤ登山
用具、前記遠征の際採集せる植物標
本等にて候。

我々としてはこのさゝやかな催し
物にて、一般登山家のヒマラヤへの
關心を多少とも惹起せば本懐之に過
ぐるもの御坐無く候。先は簡單なが
ら御報知迄。(三高山岳部)

拜啓 先日小暇を得て三月三十一
日より四月四日迄、俄鬼、唐澤嶽地
方に旅行致し四月三日、高瀬川第五
發電所を午前五時發、午前十一時二
十二分唐澤嶽登頂。途中、行程三分の
一をスキーを ひ。懸垂谷の登攀。
輪カンジキ行。等各種のコンピネー
ションに相當の興味を感じ申候。殊
に一ノ瀬の一八〇〇米附近の凍氷谷
(瀧と雪崩の「コスリ」にて生ぜる)の
アイゼン行は緊張味を覺え申候。

(小池文雄)
拜啓 日本山岳會の皆々様春の雪
の便りを雪の立山室堂より叫ばせて
頂きます。四月十四日來、藤橋泊
り日大、立大山岳部の連中と交代に
なりまして翌日追分泊り、一日降雪
にて滞在、春山とてガス深し、翌日
も佳良ならざるも室堂淨土をエンジ
ョーイさせて頂き、十八日雄山登頂、

その足にて一ノ越より室堂を後に鯉
の横姿を斜に、春の新雪上を一息に
藤橋迄滑降。來シーズンにはスキー道
路の開サグに細陀ヶ原は一層素晴ら
しいものとなるでせう。諸兄にシー
ハイルを祈ります。
立山を下りて富山驛より
中島治一郎

會務報告

四月定例理事會報告

四月十二日午後六時半本會事務所
に於て附會
出席者

- 高頭、小島、冠、横、松方、茨木
- 神谷、額田、逸見、飯塚、三田、
- 三木、黒田、角田(囑託)
- 一、山日記編輯の件(角田)
- 一、山岳第二十九年第一號報告(逸
見、黒田)
- 一、會報印刷所變更の件(逸見)
- 一、會員優遇に關する件(黒田)
- 一、黒部保勝運動に關する件(冠)
- 一、山小屋視察に關する件(横)



新着圖書

- 中川、富川著 大峰山脈と其溪谷 朋文堂
 地學雜誌 二月—四月號
 山 四月號 梓書房
 ケレン 同 朋文堂
 山小屋 同 同
 登山とスキー 同 黎明社
 體育研究所概要 體育研究所
 第五回體育研究會會誌 同
 寫眞月報 四月號 小西六本店
 ツトリスト 同
 ジャパン・ツーリスト・ビュロー
 國際觀光 第二號 國際觀光協會
 甲山峽水 第五號
 山梨縣勝地協會
 登高會々報 第一號 登高會
 霧の旅 第四三號 霧の旅會

- 山上 四月號 奈良山岳會
 山と溪 同 山と溪の會
 旅行 同 東京旅行クラブ
 黒木立 九六、九七 關東岳愛會
 せふり 三月號 福岡山の會
 ハデスツリヤン 二月—四月號
 アルカウ趣味 四月號 關西徒步會
 山旅 三月號 日本アルカウ會
 管見錄 同 大坂管見社
 山幸 同 阪神山岳會
 京都山岳 二月—四月號
 山彦 四月號 京都山岳會
 旅 同 東京山彦山岳會
 山 同 東京アルカウ會
 山行案内 同 橫濱山岳會
 白樺 三月號 昭和マウントクラブ
 獨立樹 三、四月號 東京山旅俱樂部
 RSC會報 二七、二八
 魚市場山岳會々報 二、三月號
 NG山岳會々報 三月號
 明峯山岳會々報 四月號
 九善山岳部々報 二、三
 日本登高會々報 三一
 東京登山溪流會々報 四月號
 がくれい會々報 二九
 臺灣山岳會々報 四月號
 關東山岳會々報 一、二號
 東京市山岳部バンフレット
 一五、一六
 山人會月報 二〇
 武藏山岳會々報 四月號

- 奈良みなみ會 四月號
 マチエー山岳會 一
 Svenska Turistforeningens Tiding
 Nr. 1/2 Feb./Mar. 1934
 Natural History vol. XXXIV,
 No. 2 Mar./Apr. 1934
 The Journal of The Mountain Club
 of South Africa No. 36 1933
 Sierra Club Bulletin Vol. XIX
 No. 1 Feb. 1934
 The Mountaineer Vol. XXVI No. 5
 Apr. 1934
 The Geographical Journal Vol.
 LXXXIII No. 3 Mar. 1934
 The Year Book of The Prairie
 Club 1933—34
 The Prairie Club Bulletin No. 284
 Mar. 1934
 Trail and Timberline No. 185 Mar.
 1934
 Bulletin Appalachian Mountain
 Club No. 7 Mar. 1934
 Die Alpen No. 3 Mar. 1934
 La Montagne No. 255—256 Jan.—
 Feb. 1934
 Club Alpino Italiano No. 2—3 Feb.
 —Mar. 1934
 Unione Ligure Escursionisti No.
 2—3 Mar.—Feb. 1934
 Butletti del Centre Excursionista
 de Catalunya Num. 464 Gener
 de 1934
 Planinski Vestnik Leto 1934 Ster.
 2—3
 W. H. Murray Walton :—
 Scrambles in Japan and Formo

sa 1934

會員寄贈圖書

田部重治著 心の行方を追うて
 以上 黒田孝雄氏
 M. Takenouchi :—
 On the Influence of Volcanic
 Activity upon the Vegetation of
 Mt. Tarumai.

耶馬溪に於ける十月の蝶相
 九重山麓の植物生育相に就きて
 植物生態學實習地としての九重山麓
 沖の島學術調査概報

以上 竹内 亮氏
 秩父山地植物要覽
 以上 前田 昌晴氏
 田山花袋著 東京の近郊
 國際パンフレット通信
 北氷洋横断新航路開拓記念號

地震 二、三、號
 以上 木村 敏吉氏

會員計報

東京市 創期會員 塚本岩三郎氏
 (明治三十九年十月入會、會員章番
 號一〇三)

昭和九年三月十八日逝去せらる、
 本會は茲に謹而哀悼の意を表す。

東京市 中村太郎氏(昭和五年八月
 入會、會員章番號一一一九)

昭和九年四月二十九日、上越一ノ
 倉岳に登山中遭難逝去せられる、本
 會はこの若き有爲なる會員の死に深
 き哀悼の意を表す。

會員章再交付

會員章紛失の届出ありたる爲、左
 の通り新に交付せり。

會員章番號一五一〇(舊一三四四)
 臺北市大安第二師範學校
 宇佐見 守

從て舊會員章一三四四號は無効と
 なれり。

退會者

昭和九年四月中

(一三六八) 東京市 村上正一郎
 (一三四二) 同 毛利 元匡
 (五〇五) 神戸市 氏家竹次郎
 (一二四二) 金澤市 柿木勝太郎
 (七九二) 東京府 神宮 徳壽

山日記發行

本年は恰度創刊以來五週年に當つてゐる。内容も大體落付く處まで改められ、特に毎年調査を要するものみの改版でよいと思はれたが、いざ編輯に着手してみると、昨年通りまゝで使へるものゝ少ないのには驚かされる。然し大體の方針は定まつたやうに思ふ。以下重なる内容に就て説明を加へる。

二、本文

登山の注意(松方三郎筆) 新稿
高度表(木暮) 五〇頁を要してゐた本項を組替へにより頁數を半減す。

山小屋山案内 新設のもの、消滅するものあり、毎年ながら變動は激しい。山小屋の數は昨年四六七に對し本年は五三二となり六五の増加を見る。山案内は一三五となり、昨年より一一の増加となる。

日程表 北アルプスでは高瀬川流域の新コース(冠)近畿地方一帶より因但境方面の日程を新たに追加(津田周二)

概念圖 本州中部山岳地帯を五葉と入る。本日程表のルートと山小屋の位置を數字で表す。

山岳語彙 當初の目的は大體達したるものとして、削除

登山團體 本年は三七一にして、昨年より二一の増加。

山岳文獻抄 削除
地形圖の見方(岡部菰) 登山に於て注意すべき地圖の見方及符號の説明(新稿)

星圖 創刊當時よりの懸案でありながら、本年初めて設ける。

雲型十種表(黒田正夫) 雲の種類の特質を説明し、雲型を圖解す。

誌頁數 二百二十二頁

表紙 レザークロース、エビ茶色
定價 一圓(別項参照のこと)

發行 五月廿五日 梓書房發賣
尙カパーとして絹地防水布の袋を作る希望者に實費にて頒つ方法につき研究中。以上當日編輯委員

山日記會員引續約募集

例年の通り會員の便宜を計るために左記により頒配價の豫約を募ることに致しました。多數會員諸氏の御申込あらん事を希望します。

頒配價 金八十錢

送料 金四錢

申込期限 五月十日

配本 五月下旬

申込所 本會事務所

(備考)

1 現金にて取扱のこと

2 送金は申込と同時に、可成振替貯金の利用を願ひます(振替東京四八二九番)

3 申込部數に制限なし

有志晚餐會記事

時 昭和九年四月五日

所 隅田川兩國橋側「二葉」

春秋二回に開く恒例の晚餐會を今度は柳橋の二葉で開催。午後六時の開會頃より靜かな春雨が降り出す。遠來の珍客多く又初登場の會員の顔振れもか賑に稀に見る盛會であつた。横さんの開會の御挨拶に始り次で食事に移り、午後十時竹内亮氏の九州耶馬溪の十六ミリア映畫を以て散會。次回の世話人は冠松次郎、黒田正夫、松方三郎の三氏と決定

世話人 英木猪之吉

横有 恒

角田 吉夫

當日の出席者左の如し

高頭仁兵衛 藤田 國馨 田邊 主計

山崎 春雄 伊藤秀五郎 山田 多市

澤 智子 岡塾徳之助 松方義三郎

星野光之助 英木猪之吉 酒井 忠一

磯貝藤太郎 岡本 勝二 大熊 保夫

澤井徳太郎 鈴木 治孝 中司 文夫

飯塚篤之助 冠松 次郎 黒田 正夫

松本 善二 吉田 竹志 吉澤 庄作

東 良三 竹内 亮 横 有恒

田中 菅雄 角田 吉夫 武田 久吉

澤本千代次郎 井田 清尾 崎 喜八

橋原良一郎 賀 富藏 木村 一男

矢作 太郎 加藤 保二 渡邊 達三

宇田川久太郎 櫻内敏雄 伊藤朝太郎

水野啓治郎 黒田 孝雄

(以上四十三名)

旅の疲れに

旅先で誰も困ることは汽車や自動車に揺られて肩が凝ったり腰が痛んだり、足が疲れたりすることです。サロメチールがこんな時に大變役に立ちます。入浴の後にこれを充分擦り込んでをきます。すると翌朝までに大抵な痛みや凝りは忘れて了ひます。歩行に疲れたときなども少し擦り込んでをけば大變足が軽くなります。旅に慣れた人達がよくポケットに入れておますが、成る程こんなとき誠に重寶なものです。(一圓と五十錢とあり)



編輯後記

會報の四月號が突然休刊となつたのは、度々この欄で繰返された原稿不足の爲ばかりでなかつた。印刷所の問題もあつたが、實際問題として休んで了つたのであるが、之に對して會員諸賢から少なからざる御叱言を頂戴して恐縮に思つてゐる。だが、それは會員諸賢の會報に對する厚意の發露として、我々は寧ろ喜びを感じた。その上、今月は田へ水ひくまでもなく、誠によい玉稿を宛め得た喜びの座を大きくしたい。寄稿家諸賢へ誌上から感謝致します。會報に對する會員諸賢の關心は、一つの不幸な事柄が力強く表示してはくれたが、諸賢の厚意は陸續と机上山をなす原稿の到來によつて、更に現れて戴きたい。編輯委員は唯に漠然と努力を誓ふに止まらず積極的に働かうと思つてゐる。が、諸賢も積極的に原稿を寄せられるやうにもう一度お願い致します。

また、各學校の山岳部の諸君も今月の立大の諸君の如く、遠慮なく學校報告を寄せて頂きたい。青年の血は誌面に數段の活氣を呈するに相違ひない。

地方在住の會員諸賢に願ひする各位の通信を待望するも、獨り編輯掛のみではない。

荒井氏も云はれてゐるやうに會史を欲しいと思ふ。その方面の材料も會報誌上で蒐集する一助たらしめるために、來月から一工夫するつもりである。各位の御支持を願ひたい。

昭和九年五月十七日印刷
昭和九年五月二十日發行

發行人 額 田 敏
編輯印刷人 福 島 昌 夫
東京市芝區琴平町一(不三三三三)

發行所 日本山岳會
廣告一手取扱 進 恒 社

(多木印刷所印刷)

フアルトボートもて

海に戯れ 川に挑め

フアルトボート スポーツ

感激と興奮と緊張との素晴らしいトリオに陶酔出来るこのフアルトボートスポーツこそ新時代を表象するスポーツです。

大気と太陽 健康と生活への緊張力に對する憧憬はこのスポーツに依つて手易く満足出来ます。このボートの特徴は字で示す様に何處にでも持参組立てられ楽しめる點で、神祕の影宿した湖沼で舟を滑らすのも、激流岩を喰む川での挑戦も、限らない太洋での帆走も思ひの儘エンジョイ出来るものです。その味ふ愉悅感にはスキースポーツに勝るもので正に冬期以外に於けるスポーツの王者として誇り得るものです。新時代の若人に、あらゆる希望と幸福とを無限に有するこのフアルトボートを捧げます。



美津濃

神田 小川町

銀座 五丁目

1人乗 ￥195.00

1人乗 ￥225.00

OSAKA TOKYO KOBE KYOTO NAGOYA

内 容

暦
日記欄
登山經歷欄

自由日記欄
住所欄

登山の注意
遭難信號
冬期登山
服装・用具・食料
登山用品表
登山用食料品目録
應急手當及び登山衛生
本邦主要山岳高度表
本邦主要峰高度表
外國の高山百座
各國主要峰高度表
高山植物採取規定
山小屋

山 案 内
帝室林野局・營林署所在地
日程表
全國登山團體一覽
各國山岳會一覽
地圖使用上の注意
十種雲級表
星 圖
地名解綴
山岳寫眞要項
日本山岳會々則
寒暖計比較表
度量衡

編會岳山本日



版年四三九一

日一十月六年九和昭自
日一十三月五年十和昭至

賣發旬下月五

者筆執及員委編
(順番十五)

角津園木黑黑冠
田田部 暮田松
吉周 理 正孝次
夫二薮郎夫雄郎
渡三松逸藤額
邊田方見島田
幸三眞敏
漸 郎雄男

送定表鉛菊
料價紙筆半
四一裏差截
錢圓附附三
錢圓附附七
錢圓附附〇
錢圓附附頁

振電東京
神田
電話
東神
京市
神田
二田
七二
八七
六四
七五
四一
番八

梓
書
房